

プログラム・ノート

越懸澤麻衣

「ピアノ五重奏曲」は、18世紀後半から作曲されるようになったジャンルである。ピアノ+弦楽四重奏という編成が多いが、今回演奏される作品のように、第2ヴァイオリンの代わりにコントラバスが用いられることもある。ピアノ三重奏曲や四重奏曲など、より編成の小さな室内楽に比べると作品数は多くないが、それでも魅力的な作品のあるジャンルだということは今回の演奏でお分かりいただけると思う。

前半に演奏される3作の作曲家たちは、(残念ながら皆、今日では演奏機会の少ない作曲家だが)ベートーヴェンと同世代の、当時は名声を博した音楽家である。ヤン・ラディスラフ・デュセック(1760～1812)はチェコのボヘミア地方出身で、ヨーロッパ中を演奏旅行で回った最初のヴィルトゥオーソ・ピアニストの一人。**ピアノ五重奏曲 へ短調 作品41**は1799年にロンドンで初演された。ピアノの力強い上行アルペッジョで始まる第1楽章は、初期ロマン派を予告するような美しい旋律が特徴的である。アンリ=ジャン・リジェル(1770～1852)はパリで活躍した音楽家で、とくにピアノ教師として高く評価された。1826年にパリで出版された『**華麗なる大五重奏曲 二長調**』**作品43**は、その名の通り全体的に華麗な作品で、ゆったりしたテンポの第2楽章も装飾的な音型が際立つ。そしてピアニストとして大活躍し、当時はベートーヴェンと人気を二分するほどだったというヨハン・ネポムク・フンメル(1778～1837)。彼の**ピアノ五重奏曲 変ホ短調 作品87**は1802年に作曲された(今回は第3・4楽章のみ演奏)。これは同じ編成の名曲、シューベルトの五重奏曲「鱒」に影響を与えたのではないかとされている。

プログラムの最後はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が1799～1804年に作曲した**ピアノ協奏曲第3番 八短調 作品37**。ハイドンやモーツァルトからの影響を脱し、独自性がぐっと強まったピアノ協奏曲である。「協奏曲」とはいえ、今回はオーケストラではなく弦楽五重奏の伴奏で——ヴィンツェンツ・ラハナー(1811～93)が編曲し、1881年に出版したヴァージョンに基づいて——演奏される。これはベートーヴェンの没後の編曲だが、ピアノ協奏曲は18世紀末以来しばしば室内楽編成で演奏されていた。豪華なオーケストラ伴奏では演奏できないが協奏曲を弾いたり聴いたりして楽しみたい……そうした欲求に応える室内楽伴奏版は、オーケストラの代替品にとどまらず、この作品の新たな魅力を見せてくれるだろう。

(こしかけざわ まい・音楽学)